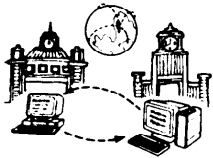


巻頭言



ダウンサイジング—情報処理技術者の困惑—

鶴 保 征 城†



コンピュータ業界では、ダウンサイジングに関する議論が盛んである。

一般の会社の情報処理部門の人たちは、これまで社内の情報システムを集中管理し、自分たちは計算機技術のプロと自負してきた。ところが、メインフレームコンピュータ(MFC)上に作り上げてきた大規模システムが、大学の実験用のUNIXをのせたワークステーション(WS)やパソコン(PC)でできるという。その実現性に疑問を感じつつ、その影響力の大きさに困惑している。

社内において、ダウンサイジングの可能性に対する期待は大きい。

経営者は、常日頃、情報システムに膨大な投資がなぜ必要なのか？一旦導入したMFCのメーカーとなぜ半永久的につき合わなければならないのか？疑問に感じていた。ダウンサイジングによる大幅コスト減、オープン化と聞けば、興味をもつのは当然である。

社内の研究者や技術者は、大学時代からずっとUNIXを使っている。彼らは、WS/PCで社内システムが構築できる確信はないものの、それほど困難とは思っていない。

現業部門のユーザは、情報部門に機能追加を依頼すると実現に時間も費用もかかることに疑問もっている。一部の部門では、WS/PC上に独自のシステムを実現している。このような部門のWS/PCに詳しいものは、WS/PCの処理能力大幅向上によりMFC上の機能も実現可能となり、情報部門へ色々意見を言ってくるようになった。ところが情報部門の人のWS/PCに関する知識が十分でないため、行き違いが生じることがしばしばである。

WS/PCに関しては、社内には情報部門よりある意味で知識の深い人がごろごろしている状態である。

ダウンサイジングに対する、MFC技術者の反

応は冷たい。確かに、現状のMFC上に実現した膨大なシステムをWSやPCにそのままリプレースできるものではない。オープン化は、最も適切な機器を導入する意味では魅力的であるが、システムトータルの技術的問題について解答をあたえているわけではない。

確かに、ダウンサイジングは魅力を秘めている。社内システムはかなり肥大化して限界にきている。これは、①一括開発のため、必要最小限の機能だけでなく先を見込んだ必要以上の機能を実現する傾向がある。②一括管理のため、一番高い信頼性を必要とするデータ、処理を基準とし過度の信頼性を保証している部分が多い。ことに起因している。ダウンサイジングにより現業部門(ユーザ)が直接かつ必要時に機能を追加できれば、肥大化は避けられる可能性がある。また、情報部門は会社にとっての根幹となる業務、データ管理に集中でき、よりグレードの高いサービスを実現できる。

しかし、不安材料も多い。ダウンサイジングは、結局分散処理を導入することになり、システム全体の統制は簡単にはいかない。信頼性について誰がどのように責任をもつのか。メンテナンスについても同様である。単なる技術移行でなく、社内制度まで影響がでてくる可能性がある。

確かに、UNIXに慣れ親しんだ研究者、パソコンマニアのようなオープンシステム技術者はいる。しかし、上のような諸問題を解決できるオープンシステム化(MFCからWS/PCへの移行)技術者は、まだ数少ないのではないだろうか。情報部門の技術者には、計算機のプロでなく情報処理技術のプロと自覚して、この問題に対処してほしいものである。

なお、本稿の執筆では、本学会連続セミナー、第1回「ダウンサイジングとオープン化の課題」(5月22日)で多大な示唆を受けたことを付記し講演各氏に謝意を表す。(平成4年6月11日)

† 本会理事 NTT ソフトウェア研究所